

2022年1月30日（日）
宣教 『食べものを与えるイエス』
聖書：マルコによる福音書8章1節～10節

◆四千人に食べ物を与える

- 1:そのころ、また群衆が大勢いて、何も食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。
- 2:「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。」
- 3:空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまうだろう。中には遠くから来ている者もいる。」
- 4:弟子たちは答えた。「こんな人里離れた所で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるでしょうか。」
- 5:イエスが「パンは幾つあるか」とお尋ねになると、弟子たちは、「七つあります」と言った。
- 6:そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、七つのパンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、人々に配るようにと弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。
- 7:また、小さい魚が少しあったので、賛美の祈りを唱えて、それも配るようにと言われた。
- 8:人々は食べて満腹したが、残ったパンの屑を集めると、七籠になった。
- 9:およそ四千人の人がいた。イエスは彼らを解散させられた。
- 10:それからすぐに、弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方に行かれた。

おはようございます。

今日の聖書の箇所は、イエスが、「四千人に食べ物を与える」という話です。マルコによる福音書を少しづつ学んでいますが、これに似た話はマルコによる福音書の6章30節から44節にもありました。どうして似た話があるのかと思いますが、この出来事を人々はとても思いつたえていたのだと思います。

今から約2000年前のユダヤ社会では、それほど食べ物に関することが切実なことであったのだと思われます。

昔、20代の頃京都で教会に通っていた時のこと、その教会の教会員で大学の

福祉学の専門家だった今は亡き嶋田啓一郎先生が「人間にとって食べることは人生の半分の楽しみだ。」と言われていたことを思い出します。洲本教会では、昔からハンガーゼロへの昔は国際飢餓対策機構と言われていましたが、支援活動を続けていますが、ご存知のように、今でも世界には食べることの出来ない人たちが多くおられます。女性会では支援の募金活動をしています。

今日の聖書の個所で、イエスさまが話を聞きに来た人たちの食べもののことを気にかけておられたことを思います。

愛とは、ただことばや気持ちの問題ではなく、具体的な行いで示されることなのだと思わされます。昔、テレビの番組で「同情するなら金をくれ。」と叫ぶ少女をテーマにしたドラマがあったことを思い出しました。

聖書のことばに聞きましょう。

1:そのころ、また群衆が大勢いて、何も食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。イエスの所には、大勢の人たちがイエスを見て、その話を聞くために、またいやしの業を見ようと思って、中には遠くから何日もかけて集まって来ていたようです。そこに、「何も食べる物が無い。」という現実がありました。

イエスは、そのことを知り、弟子たちに語りかけられたのです。

2:「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。

3:空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまうだろう。中には遠くから来ている者もいる。」

「群衆がかわいそうだ。」群衆とは、「飼う者のいない羊」のことを表していると聞いたことがあります。また群衆とは顔が見えない存在です。

羊は、ばらばらで仲間で助け合うことをしないようです。それに比べて山羊は仲間で敵にも向かって行くそうです。また「かわいそうだ。」という言葉は、ギリシア語で「スプラグクニッオマイ」という言葉が使用され、それは「腸が痛む」という意味です。イエスさまは、自分の周りに救いを求めて来た群衆の様子を見て、彼らが抱えている様々な問題や悩みを知り、見抜き、腸を痛めるほどの気持ちになられたのだと思います。

「3:空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまうだろう。中には遠くから来ている者もいる。」このままでは、出かけて来た所に帰る途中で、体力も気力もなくなり弱り果ててしまうことをとても心配されたのです。

イエスさまは群衆の弱さに痛みを感じて共感されたのです。わたしの大好きな

ドイツ語のことばに、「Mitleiden」（ミッツライデン）という言葉があります。普通、「同情する」とか訳されますが、このことばの意味は「共に苦しむ」という意味があるのです。Mit は共に、leiden は苦しみということです。「共に苦しむ」

これば、神さまの愛、イエスさまの愛、そこから人と人との愛を表すことばだと思います。イエスさまの十字架の苦しみを思います。

一方、弟子たちはあどけないほどに正直です。

4:弟子たちは答えた。「こんな人里離れた所で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるでしょうか。」

実際、その場所には、家もなく、ましてパンを売っている店などはなかったのです。

「人間の策が尽きたところから神の働きは起こって行く。」と言われます。

正にこの所に、イエスさまによって神さまの不思議な力、善き力により、善き業が人々を包み込んで起こって行ったのです。

5:イエスが「パンは幾つあるか」とお尋ねになると、弟子たちは、「七つあります」と言った。6:そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、七つのパンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、人々に配るようにと弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。

イエスは弟子たちに食べ物の確認をされます。「パンは幾つあるか」と。一つも無駄にはされないのです。

弟子たちは、イエスのことばに従い、パンの確認に応えます。「七つあります」と。イエスは地面に座るように群衆に命じました。わたしは、この場面で、詩編の23編を思い出すのです。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。」とのダビデの賛美した主の言葉です。置かれている現実は厳しくても神さまが与えてくださる平安が心を包み込むように感じるのです。

弟子たちはイエスの言われるままに従い、パンを群衆に配ったのです。

するとそこに、常識では考えることのできない不思議な、すばらしいことが表れたのです。そこにいたすべての人々が食べることができたのです。

イエスに従った弟子たちは、これは天と地を創られた大いなる神さまの御業であることをイエスのことばに従う中で知って行ったのではないのでしょうか。ちょうどあのカナの町での結婚式での祝いの場で、ぶどう酒がなくなって困っていた時、イエスから「水がめに水をいっぱい入れない。」とのことばを聞いて、

黙々とその言葉に従った召使だけが、その水がかおり豊かなぶどう酒に変わったことを知ったようにです。

7:また、小さい魚が少しあったので、賛美の祈りを唱えて、それも配るようにと言われた。8:人々は食べて満腹したが、残ったパンの屑を集めると、七籠になった。そこにあった小さい魚、干した魚だとも言われます。それも大切に用いられ、配られました。人々は食べて満腹した。不思議なことが起こったのです。正に神さまの善き力です。

「残ったパンの屑を集めると、七籠になった。」。このことは、その場所に溢れ出る喜びと感謝が広がったことを表しているように思えるのです。

この出来事は、弟子たちにとって、イエスさまが十字架にかかれる前のイエスさまとの「最後の晚餐」と共に、初代教会の聖餐式を思わせるものがあると言われています。この個所は、カトリックの神父の本田哲郎神父、大阪の労働者の町釜ヶ崎で長く活動された方で日雇い労働者の人々の中で聖書を読み続けられ、日本語に訳されて「小さくされた人々のための福音」という聖書訳を完成させられました。今日の聖書個所の小見出しには、「痛みの共感から、わずかな食べ物を分け合って、四千人が満ち足りる」とあります。そのようなことも起こったのかもしれませんが。

イエスの愛と神さまの憐みの力の出来事として深く強く人々に記憶されていた出来事として口から口に伝えられたのだと思えます。

9 節、10 節。

9:およそ四千人の人がいた。イエスは彼らを解散させられた。 10:それからすぐに、弟子たちと共に舟に乗って、ダルマヌタの地方に行かれた。

ダルマヌタ地方は、今日どこであるかは特定できないそうです。ガリアヤ湖の西側にあるマグダラかもしれないと言われています。

主イエスの宣教の働きはこれからも続いて行きました。時と場所を超えて、主イエスにある神さまの働きは時代を超えて今日も続いているのです。

イエスがこれから向かわれた町の名は、たとえ記録に残っていなくても、神さまの記録には確かに残り続けるのです。愛の働きは残り続けるのです。

今日もこれからも、淡路島や日本中、世界のあの町、この町で弱り果て、痛み悲しんでいる人たちの上に名もない働き人を通して起っている善き出来事だと思うのです。そのことを覚え心から感謝し、愛を分かち合っていきたいと思います。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。